

▼特別展「港川人展」 平成14年8月20日(火)～9月29日(日)



港川人1号男性全身復元立像(部分)

平成14年度の特別展は、沖縄の誇る人骨化石「港川人」を題材にした「港川人展」を催すことになりました。会期は平成14年8月20日(火)～9月29日(日)で、夏休み後半より9月中という期間になります。この期間は、家庭内で家族そろって学習する場合には夏休み中に、また学校として利用するには比較的行事の少ない9月に学習できるように設定しました。

特別展関連事業として、次の催事を計画し、様々な活動を通して「港川人」を考える機会にしたいと思います。

8月24日(土) シンポジウム「港川人の世界」

県内外の専門家によるシンポジウム。人骨化石研究の権威である国立科学博物館の馬場悠男人類学研究室部長、沖縄県の考古学を牽引してこられた高宮廣衛沖国大名名誉教授をはじめとする研究家数名によるシンポジウムです。

9月21日(土) 特別講演会「港川人がいた頃の沖縄は」

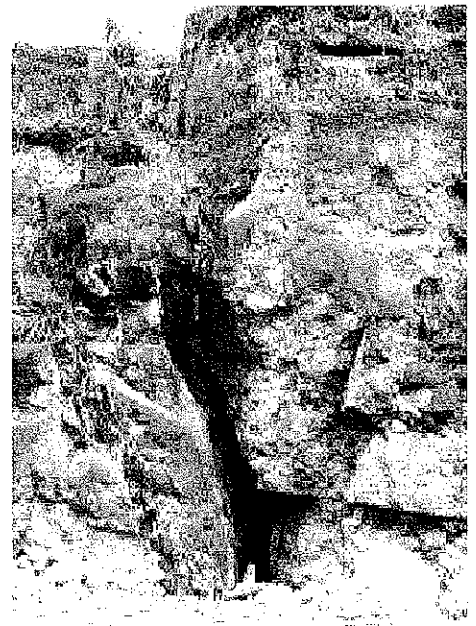
動物化石の第一人者である群馬県立自然史博物館の長谷川善和館長による講演会。県内各地で発見されている動物化石をとおして、港川人がいた当時の琉球列島の環境について語っていただきます。

そのほか、沖縄本島南部地域で人骨化石が出土した洞穴などを現地で紹介する野外巡検を、8月25日(日)、9月8日(日)、14日(土)に、また子供たちが興味のある化石や、岩石の鑑定会を夏休み期間中の8月28日(水)、29日(木)に行う予定です。

港川人は、1970年大山盛保氏の精力的な努力によって発見された人骨化石で、その後の調査により約18,000年ほど前の更新世後期人骨であることがわかっています。分類学的に、港川人の特徴は現代人と同じ「新人」というタイプであり、港川人は新人の中では古いタイプにあたります。港川人と日本各地で見られる縄文人とはよく似ているので、関わりが強いと考えられ港川人が縄文人のルーツといわれるゆえんです。

港川人化石の特徴は保存状態がよいだけでなく、全身の状態がわかるほどたくさんの骨が出土したことにもあります。このようにほぼ全身の骨が見られることは希なことで、これにより港川人の貴重な情報が数多く入手でき、他地域産人骨と比較することで東アジアや日本における人類(特に新人)の進化やルーツを知る資料となるのです。まさに世界的に貴重な標本といえます。

これら港川人の化石は、現在東京大学の人類学教室で管理されていますが、今回の特別展ではこの本物の化石を出展することになっており、久しぶりの里帰り展となります。また県内の別の場所で見つかった人骨化石も同様に里帰りを果たす予定で、これほど本物をそろえる展示会は科学博物館開催の展示会以外では聞いたことがありません。



港川フィッシャー(具志頭村)



▼特別展「かざりとかたち」を終えて

さる、平成13年11月13日（火）から開催されておりました、平成13年度国立博物館・美術館巡回展「かざりとかたち」展が、12月9日（日）に約7,000名の来館者を迎え、好評のうちに閉幕いたしました。

展示作品には、国宝、重要文化財など19点が含まれ、観覧者からは、鑑賞の機会に対して感謝と喜びの声があり、何度も足を運ばれ作品に見入る姿も見られました。

時代を超えて訴えてくる作品の素晴らしさに対して、「色々なことがわかった」「見応えのある作品」「日本の美を堪能できた」「身近で、親しみやすく感じた」などの感動の声がありました。初めて目にする刀や太刀に多くの児童生徒から「すごくきれい」との感想などが寄せられました。



▼第26回移動博物館 in 南大東村を終えて



沖縄県立博物館では、日頃博物館を訪れる機会の少ない地域の方々に、博物館活動の一端にふれていただくため「移動博物館」を毎年実施しております。

今年度は平成13年11月24日（土）、25日（日）の2日間、南大東村地域スポーツセンターで開催いたしました。展示会は、「大むかしの生物」「沖縄の自然、歴史、暮らし」の2つのコーナーで構成され、内容は大型の恐竜骨格標本をはじめ、沖縄の自然・歴史・文化を総合的に把握できるように企画し、約400点の資料を展示いたしました。また、会期中に小中学生や、一般の方々を対象にして、南大東島で見られる野鳥などの野外観察会を実施いたしました。展

示会開催中、子供から大人まで多くの方々が会場に訪れ、熱心に展示資料に見入る姿や、博物館職員の説明を聞く姿が見られ、好評のうちに終了いたしました。

▼体験学習教室「ウチナーそばをつくろう」

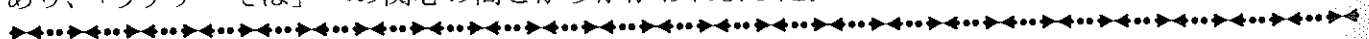


体験学習教室「ウチナーそばをつくろう」の講座が、11月18日（日）と25日（土）の二日間にわたって行われました。10月17日の「沖縄そばの日」と前後しての受講生募集が功を奏し、40名の定員に対して128名の応募を頂くことができました。

抽選された40名の受講生は、初日に、ビデオで「ウチナーそば」の作り方を学んだ後、モクマオウやがじゅまるやデイゴの枯れ枝を使っての木灰づくりを行いました。二日目は、初日にできあがった木灰から灰汁を作り、沖縄そばの旨味を生む灰汁の比重測定について学び、その灰汁を使っての生地づくりを行いました。生地をのぼしながら

「むつかしい」「うでや肩が疲れる」「生地が切れた」等の声が連発し、孤軍奮闘の状況でした。最後は、自ら作った沖縄そばの麺をシンメーカーでゆでて試食しました。手作りの「ウチナーそば」に幸せを噛みしめながら舌鼓を打っている様子が微笑ましくなりました。

講座終了後も「ウチナーそば」に関する色々な質問（だし、具、薬味等）や次年度計画への要望もあり、「ウチナーそば」への関心の高さがうかがわれました。



▼新収蔵品の紹介

当館では昨年、以下のような資料が寄贈・収集されました。ありがとうございました。寄贈や収集等により収蔵した資料は年度ごとに企画展「新収蔵品展」として一般公開しています。

平成14年度は7月23日(火)～8月11日(日)に実施します。多くの皆様のご来館をお待ちしております。

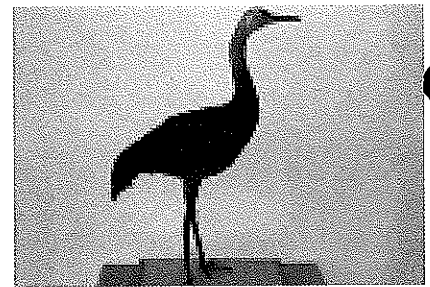
【歴史】…「戦前沖縄の写真」

歴史資料分野での寄贈資料は写真資料が多くありました。昭和10年代から昭和30年頃までのもので、その数は3件646点でした。そのひとつに、洋画家で文化勲章受章者の伊藤清永氏のアルバムがあります。昭和12年から14年にかけて4回ほど来沖した際に撮影された写真等265枚が収録されています。那覇の市場や首里、波の上などの風景や人物を写したものが多くあり、当時の沖縄の様子や人々の生活を彷彿させてくれます。



【自然史】…「ナベヅル」

自然史分野は、鳥類剥製標本や両生類の骨格標本の製作を行いました。その中から、ここではナベヅル(若鳥)剥製標本を紹介いたします。ナベヅルは国内に繁殖地がなく、冬季に九州地方鹿児島島の出水平野に、毎年約4千羽以上の群が越冬のため訪れることで有名な鳥です。県内ではごくまれに迷鳥として飛来するだけで、この個体は、2001年11月29日に浦添市で保護されたあと、こどもの国で治療しましたが、助かりませんでした。

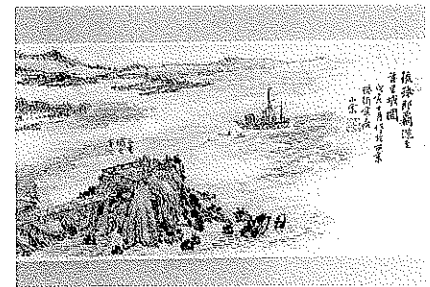


【美術工芸】…「琉球国那覇至首里城図」

明治11年頃的那覇港から首里までの風景を描いた巻物が、平成13年の4月に大分県在の桑門豪氏から当館に寄贈されました。

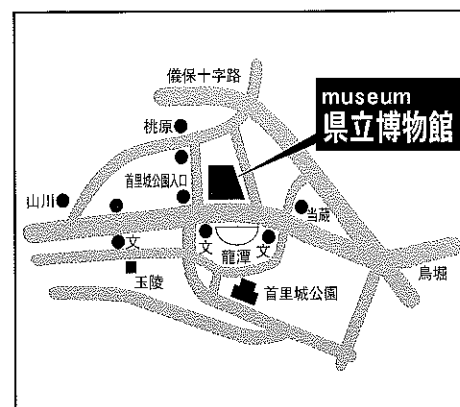
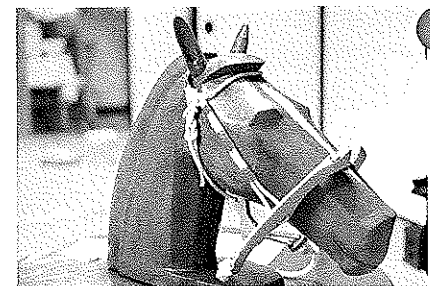
この絵は小栗憲一(号・布岳、1834～1915)が描いたもので、那覇から首里までの様子を山水画風にあらわしたものです。

小栗は本願寺の使僧として、王府に処罰された浄土真宗の信者の刑を取り消すよう要請するために来琉しました。この絵はその時のものです。



【民俗】…「ムゲーと着装模型」

ムゲーは、2本の木枠で馬の面を挟み、制御する沖縄式おもがいのこと。馬の頬骨が当たる部分に突起を作り、手綱は紐1本で、左右どの方向にも馬を導くことができます。昭和40年代まで全県下に普及していました。製作者は、那覇市内でムゲーの木部を加工・成形し、馬具の販売業者に納品する職人でした。ムゲーの独特な紐の結び方が消滅することを惜しみ、保存・伝承するため、馬頭模型を自作し、着装したものです。



バスのご案内

- 那覇空港発
13番(石嶺空港線)「当蔵」バス停下車、徒歩3分
125番(知花首里線)「桃原」バス停下車、徒歩10分
- 市内バス
1番(首里識名線)・12番(末吉線)・14番(泊線)・17番(石嶺開南線)の「首里城公園入口」、または「当蔵」バス停下車、徒歩3分
9番(小祿石嶺線)の「桃原」バス停下車、徒歩10分
- 市外バス
46番(糸満西原線)「首里城公園入口」、または「当蔵」バス停下車、徒歩3分
97番(琉大線)「桃原」バス停下車、徒歩10分

沖縄県立博物館だより

No. 47

発行年月日：平成14年3月
(年2回発行)
※次回の発行予定は11月頃です

編集・発行：沖縄県立博物館
住所：〒903-0823
沖縄県那覇市首里大中町1-1

TEL(098)884-2243
FAX(098)886-4353
<http://w1.nirai.ne.jp/oki-muse/>